表現される顔

公開シンポジウム「顔と文化」シリーズ（第2回）

財団法人 花王芸術・科学財団

公開シンポジウム「顔と文化」シリーズ（第2回）

【表現される顔】

2007年6月23日（土） 13：00～17：10
大手町サンケイプラザ 4Fホール
（東京都千代田区大手町1-7-2）

主催　財団法人 花王芸術・科学財団
共催　日本顔学会

表現される顔

目次

基調講演…………P2～P7
「表現される顔」
原 島　博（東京大学教授・日本顔学会会長）

講演………………P8～P15
顔には魅力がいっぱい
「顔に映る社会」
田 沼　武 能
（写真家・東京工芸大学芸術学部写真学科 名誉教授）

講演………………P16～P26
「ほとけの顔もなんとやら」
～仏像のお顔のはなし～
籔 内　佐 斗 司
（彫刻家・東京藝術大学大学院美術研究科 文化財保存学 教授）

講演………………P27～P31
「ゼロ“0”の顔」
三 林　京 子
（女優・落語家・大阪芸術大学短期大学部広報科 専任教授）

全体パネルトーク…P32～P40
パネリスト　原島 博・田沼武能・籔内佐斗司・三林京子
司 会　頼近 美津子

【表現される顔】

原島　博先生　基調講演
HARASHIMA HIROSHI

本日3人の先生方が、「顔には魅力がいっぱい」「ほとけの顔もなんとやら」「ゼロの顔」というテーマでお話されるということを聞き、私も自分なりに同じテーマでお話させていただこうと思います。

仏の顔

今から約10年前のことですが、奈良県庁から、変わった依頼が参りました。それは、奈良県で出している「グローバル奈良」という広報誌の中で、工学博士原島博の「顔博士といっしょに仏様の顔鑑賞」というページをつくりたいので、ぜひ奈良に来て仏像を見てほしい、そこで僕が話したことを録音して記事にしたいという内容でした。

僕の専門は電子情報工学、コンピュータですから、仏像についてはまったく知りません。でも、せっかくの機会だからと、安易に引き受けてしまったのです。その日が近づいてくると、さすがに不安になって、仏像の本を買って一夜漬けで勉強しました。恥ずかしいことですが、如来と菩薩の違いを、そのとき初めて知りました。

買った本を読みながら、これは正直言ってダメだと思いました。この仏像の微笑みはアルカイックスマイルだなんて解説したぐらいでは、専門の方から見たら、笑いものになるだけだ。もう、しようがないと、居直ってしまいました。

どのように居直ったかというと、やはり相手が仏様だから、仏様にお任せするのがいいのだ。まずは、拝顔しよう。そして仏様と何か語り合ってみよう。そうすると、その中から何か教えてくださるのではないかと。

そのためには、なるべく仏様と長い時間接していたいと思い、少なくとも仏様それぞれに30分、できれば1時間、その前に座らせてくれという条件をつけました。

そこで、興福寺の阿修羅像、旧山田寺の仏頭、そして東大寺の不空羂索観音像（ふくうけんさくかんのんぞう）だけに限って、それぞれ1時間見る時間をくださいとお願いし、奈良へ出かけて行ったのです。

ところが1時間隅のほうで、じっと見ていようと思ったら、普通のカメラのほかに、テレビカメラでも撮影していて、ずっと僕に大きなマイクを向けている。これでは周りの皆様に迷惑になると思い、人気のある阿修羅像は避けました。

それでもなんとか、その隣にある旧山田寺の仏頭を、1時間見させていただきました。こちらは600何年かにつくられ、別のお寺に移された後、1411年に焼けたのですね。その焼けてしまわれていたのを誰も知らずに、昭和12年に発見された首から上だけの仏様です。

この時の1時間は、私にとって予想もしていなかった収穫がありました。この仏頭は、焼けたために片方の耳がありません。最初はやはり、そういうところが気になりました。それから、仏様としては、ずいぶん丸顔だなとか、そんなところも気になりました。

でも、だんだんとそういう顔形を見るということよりも、その仏像さんと何か話をしているような、そんな気がしてきたのですね。こちらが仏様を見ているつもりが、むしろ見られている、そういう感覚になってまいりました。

そうすると、見られているとなると、自分はそこにどう映っているのか。あるいは、この仏様は千年以上に渡って、いろいろな人の顔を見ているはずだ。それぞれがどういう顔だったのだろうということを、想像するようになっていったわけです。

最近だったら、修学旅行の女子高生がキャーキャー騒ぎながら、この前を通り過ぎていくのを見ているかもしれない。あるいは戦乱の世に、人を殺してきたお侍が人生に落胆して、その前に1時間、2時間座っていたかもしれない。そういう人たちを、この仏様は見ていたかもしれない。

そうすると、今度は、僕自身にその時々に見られていた人との、コミュニケーションが生まれてきたのですね。これは僕にとって、非常に面白い経験でしたが、それには、40分から1時間くらい見ていないと、そういう感覚にはなれなかったと思います。

それからもうひとつ、私にとってびっくりしたことがありました。それは、最後のほうで、だんだんこの仏像の顔が、私の母の顔に見えてきたのです。

個人的なことで申しわけないのですが、私はこの仏様の企画の数ヶ月前にパーキンソン病で母親を亡くしておりました。この病気は、身体がだんだん動かなくなる病気です。入院してトレーニングをして元気になっても、退院するとまたどんどん身体が動かなくなり、それでまた入院する。その繰り返しでした。

母親は入院を嫌いましたが、家族としては入院させなければいけない。強引に入院させて、残念ながら最後は病院で亡くなり、家族は誰も死に目には会えなかったのです。親不孝してしまったなあという気持ちになっていたところに、この顔に会ったのです。だんだん、だんだん仏様

の顔が母親の顔になって、なんとなく許されたような気持ちになったというのが、私の仏様に対する体験であります。

この仏様の場合と同じで、知らない人の顔というのは、最初会ったときには、まず外見が気になります。ところが、だんだん長く付き合っていると、見るところが変わってくるのですね。それが、仏様の顔で経験できたというのは、私にとって、非常に貴重な体験であったと思います。

子どもの顔

本日の講師である田沼先生は、戦後の昭和25年頃から、「戦後の子どもたち」というテーマで写真を撮られています。その写真集をお借りして見ていたら、その中に、「松島トモ子の卒業式」というのがあり、そこに小学校6年生の私が写っていたのです。たまたま同期生に松島トモ子さんがいたのですが、田沼先生が撮られた写真に、小さい頃の私が写っていたこの偶然には本当にびっくりしました。

この写真集の帯に、こういう言葉が書いてあります。「子どもは地球の鏡だというのが、世界の子どもと向き合ってきた私の体験から得た結論だが、同時に子どもは歴史の鏡でもあり、時代の鏡でもあると思う」。まさにこの言葉どおり、私の子どもだった時代が先生の写真の中におさめられています。

と同時に、これももう20年以上前のことですが、子どもの顔というのは、場合によっては、その街の顔をつくっているという体験をしたことを思い出しました。

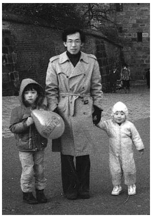
それは、1984年に、家内と5歳と2歳になる息子たちを連れて、1年間海外で過ごしたときのことです。家族でヨーロッパのある街に着き、家族をホテルに残して、まず私ひとりで、その街を散歩いたしました。

街はきれいで、天気もよかったけれども、なんとなく歩いている人たちの印象が暗い。皆表情がなくて、仮面を着けているような感じでした。こちらを見る目つきも、私がまるで犯罪者であるかのようです。このような街に家族と一緒に歩いて大丈夫だろうかと心配になりましたが、ホテルに閉じ込めておくわけにもいかず、翌日、2歳の子をバギーに乗せ、家族で街に出たのです。

欧州のある街（1984年初冬）

そうしたら、街がまるっきり違っていました。前日よりも曇っていたにもかかわらず、街は温かい印象だったのです。何よりそこにいる人たちが、明るい表情をしていて、子どもの顔を見ては「まあ、かわいい」「今いくつ？」と、優しく声をかけてくれたのです。

もうおわかりだと思いますが、私の２人の子が街を明るくしたのです。前の日、一人で歩いていた私を、街の人たちは日本から来た営業マンあたりだろうと、そんな目で見ていた。ところが、バギーを押しながら子どもと一緒に歩く姿を見て、自分たちと同じように子どもを愛しているパパだというふうに見たのだと思います。



そして、子どもを見る人たちの表情は、皆優しく、自然にいい表情になってしまいます。子どもを見る目、おそらくこれは万国共通なのではないかと思います。また、それ以上に僕が感じたのは、街というのは、そこにいる人の顔で決まるということです。つまり、街がよくなるためには、そこに当たり前のように子どもたちがいるということが大切なのかなと思うのです。

これからの街づくり、国づくり、いろいろ言われていますが、僕はやはり子どもというのを1つの中心に据えて考えていくことが大切なのではないかと、このときヨーロッパの街で体験しました。

ゼロの顔

「ゼロの顔」とはいったい何だろうと、あれこれ考えて浮かんだのは、いろんなものを差し引いて、最後に残るのが、ゼロの顔かなということです。そこで、ここでは僕がいろいろと装ったときの顔をお見せすることによって、そこからゼロを探ろうと考えています。

最初の写真は、写真館に行って撮ったものです。写真が仕上がったとき、僕自身笑ってしまったのですが、僕の職業も言わないで撮ってもらったら、こういう顔になった。向こうから見れば、私はこういう顔に見え、こういう顔に撮れば喜ぶと思ったのだろうと思います。

写真家 海田悠氏撮影の顔

一方、友人に海田悠さんという写真家がおられて、撮ってくれたのがこの写真です。やはり専門の人は、いい顔を撮ってくれますね。インタビューを受けている最中、知らない間に撮られた写真などにも、比較的気に入った写真が多く、よく使っております。

こちらの写真の顔は、日本顔学会のシンポジウムで行った実験で、歌舞伎のメイクを舞台で実演してもらった時のものです。歌舞伎の中では美男とされている「お軽勘平」の勘平のモデルを、私がやりました。どこまでメイクの力でそれらしくなるかという実験だったのですが、見ておわかりのとおり、もう私はすっかりその気になっています。

歌舞伎の顔（シンポジウム顔94）

また「フォーラム顔学」という日本顔学会の研究発表会では、髪にメッシュを入れて、革パンを穿いて暴走族に変身（写真未掲載）させられたのですが、これも面白い経験でした。

こちらはバリ島に行ったときに、そこで講演したときの服装がこれです。バリ芸術大学で開催された国際的な会議にこの格好で出ていったときは、誰も私を日本人だと思わなかった。バリの人だと思っていたところ、話し出したら日本人だったという、愉快な体験でした。

バリ島で

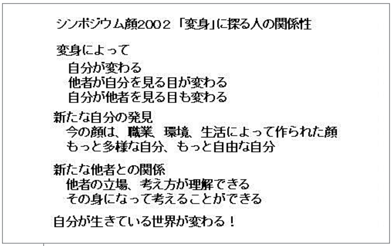
これは、5年ほど前、やはり日本顔学会のシンポジウムで「変身」というテーマを取上げたときのものです。人間変身することによって、何が見えてくるだろう。それを実際に実験してみようと、私がモデルにならされたわけです。

女装

この時は、そこに朝日新聞の記者の方がずっと付いていて、後日それが文化欄の記事になりました。「変身に探る人の関係性、発想転換、柔軟な生き方可能に」。それで、私の変身前、変身後で、ミニスカートを穿いた全身像が掲載されました。あわせて一面の朝日新聞の題字の下に、今日の代表的な記事「東大教授が女装」と。これで東大にいられなくなると思いましたら、皆「おまえは古いよ」と言われることを警戒して、「いいんじゃないの」「勇気あるよ」とプラスの評価を得ることができ、今もまだ大学におります。

要するに、このとき何がやりたかったかと言うと、変身によって自分が変わる、他者が自分を見る目が変わる、自分が他者を見る目が変わる、それを探ってみたかったのです。それと同時に、新たな自分を発見できるかもしれない。自分の顔というのは、本当に自分の顔なのだろうか。これは社会が決めているだけなのではないか。

女装によって別の自分を発見したというわけではありませんでした



が、少しですが女性の気持ちというのが理解できました。ミニスカートを穿いている時には、いい加減な座り方をしたら、大変なことになるということもわかりました。やはりこれも、体験することによって、自分の生きている世界が変わるという経験でした。

このようにふだんの自分から離れた装いをすることで、ある意味、自分の顔に囚われていないゼロの顔が見えてくるのではないかと、そういうふうに思ってお話をさせていただきました。

原島　博（はらしま ひろし）氏プロフィール

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 教授・同工学部電子情報工学科兼担
1945年東京生まれ。68年東京大学工学部電子工学科卒業。73年同大学院博士課程修了。同年同工学部講師、助教授を経て現在に至る。工学博士。映像の構造化と知的符号化を中心とする知的コミュニケーション技術、感性コミュニケーション技術、また、空間共有コミュニケーション技術の研究に従事。日本顔学会会長も務める。「顔学への招待」など著書多数。

顔には魅力がいっぱい

【顔に映る社会】

田沼 武能先生 講演
TANUMA TAKEYOSHI

写真家として

私は写真館の息子として生まれました。そのため写真を撮る相手が、いい顔をしているとか悪い顔をしているとかを勝手に評価することはできません。ましてや、この日本顔学会のように、縄文顔とか、渡来人のような顔だなんて言ったら、お客さんが来なくなってしまいます。なおかつ私はあまりお世辞を使うのがうまくなかったので、写真館の経営は無理だなと思い、それでジャーナリズムの世界に入ったのです。

この世界は、撮ったご本人からお金をいただくのではなく、雑誌社からお金をいただくので、割合自由に写真を撮ることができます。それでも、中には撮った写真が気に入らん、という方もいらっしゃいました。

私の職業は相手のお顔を拝借して成り立つわけです。ですから、撮らせないと言われるのが、いちばん困るのです。「私は写真嫌いだ」「そんなこと言わないでくださいよ。私、写真撮らないと、飯食えないのですから」そんな冗談まじりな会話も時にはあります。

私は初期のモノクローム時代から、人物をたくさん撮りました。有名人の顔はかれこれ1000人以上、不特定多数だったら5万とか10万人位、いや、もっと多いかもしれません。撮影にあたっては、自分が考え、ホレ込んで“その人の肖像”を撮っているので、どれも好きな写真に撮れたと思っております。そして、写真を撮らせてもらった方からは、いろいろなことを学ばせてもらいました。

そういう気持ちの中でつくったのが、『わが心の残像』という本です。私の中学時代は戦時中で、ほとんど学校へは行っていません。1週間に1度くらい行って、あとは勤労動員で鋳物工をして、そんな中で卒業したのです。

そのようにまともに勉強していない学校生活だったのですが、『芸術新潮』や『新潮』などの雑誌の嘱託になると、有名な先生の写真を撮りに行く機会が出てきました。私が21から26、7歳の頃で、ちょうど私の年齢がその先生方の孫と同じくらいだったのです。先生方は孫を相手にするようなつもりで、写真を撮らせて頂いたお陰で、ごく自然なご本人らしい写真が撮れたのです。

近年、写真というのは手軽にサッと撮れてしまいますが、僕らが撮

る人物写真は、その人らしさが出ることをかなり意識して撮るわけです。難しく言えば、顔にはその人の歴史が刻まれているので、その人の内面まで写し出そうと努力しているのです。出てくるかどうかはわからないですが、少なくとも私は撮っている人物の性格まで、写し出すつもりで撮っているのです。

そういう仕事をずっと続けていたのですが、撮影の時に被写体になる方が、いろいろと人生的なお話をしてくださったのです。そのお話を写真とエッセイで一冊にまとめました。

時代を後世に伝えるメディアとしての写真

話はぐんと飛んでいきますが、写真というものは、時代を後世に伝えるメディアとして、たいへん重要なものだと思っています。日本では、江戸時代の末期から、明治・大正にかけて、いろいろな写真が記録として残っておりますが、これからお見せするのは、写真が残ってない時代の記録です。

写真1

ここに写っている人物は今から500年くらい前の、インカ帝国時代の少年のミイラ（写真1）です。これは太陽の神に生贄として捧げた子どもで、この時代にはこういう生贄という習慣が、多く行われていたようです。この少年はコカの葉っぱを噛んでいたのではないかと思います。コカはコカインの素で、アンデスが原産地なのです。

この少年のミイラは、1954年に5460メートルの高地で見つかったのですが、その副葬品の中に、鳥の羽で作った袋がありました。この中にコカの葉っぱがいっぱい入っていました。きっと、親が持たせたのでしょう。左下にあるのが金のリャーマですね。銀の女性の像に、華やかな衣装を着せた女神（?）がありました。私にはこれはおかあさんの化身に思えたのです。

この時代のインカ帝国には、文字がなかったので、文字で書かれた歴史も残っていません。絵としても、器に描いた絵とか、レリーフになったものだとか、その程度しか残っていません。

ですからこのミイラが、当時の風俗や社会、暮らしを見せてくれる貴重なものなのです。そうは言っても、すやすや眠っているだけで、生き生きとしたものは伝わってこないですね。やはりそうなってくると、まだ160年の歴史しかございませんが、写真は時代社会を伝える重要なメディアではないかと思うのです。

さまざまな顔

シェークスピアの「ハムレット」の中に、「なんと素晴らしい傑作だ、人間というやつは」という台詞が出てきます。私もまた、人間というものは本当になんて素晴らしいものだと思いながら、これまでずっと人間を撮ってきました。

写真2

たまたま子どもを撮った写真が有名になってしまったのですが、私自身は、ゆりかごから墓場までとは言いませんが、子どもから老人までを被写体に選んでいます。年齢に関係なく撮っていますが、使ってくださるメディアは、みんな子どもの写真ばかりです。それで、いつのまにか“子どもの写真家”という印象が強く、そのお陰で今があるのです。

これから紹介するのは、私が2000年に出版した『人間万歳』という本の中で使っている写真です。

このお嫁さん（写真2）は、ブルガリアで撮ったものです。ブルガリアもお金持ちは、ホテルの中庭で結婚式を挙げるのですが、お金のない人たちは、こうやって家の周りの道路で、みんなで踊ったりして結婚のお祝いをするのですね。私はずいぶん多くの結婚式に出合いましたが、こんなに嬉しそうな顔をしたお嫁さんはいないです。日本だったら、角隠ししてこんな顔して笑っていたら怒られてしまうかもしれません。でも、人生の一番幸せな時の顔は、こういう顔だと思いました。

写真3

次の写真（未掲載）は、スーダンのある集落で撮った写真ですが、祭りで踊っている女性たちは、ほとんどトランス状態になっていますね。もう他のものは何も見えない。踊りに専念している顔です。こういう顔もまた人間の顔なのでありまして、人間味があふれた素晴らしい表情です。

この顔はニジェールの遊牧民（写真3）です。遊牧民というのは、砂漠の中で羊と一緒に暮らしている人たちで、自然と闘っているという厳しさが、この顔に写し出されていると思います。

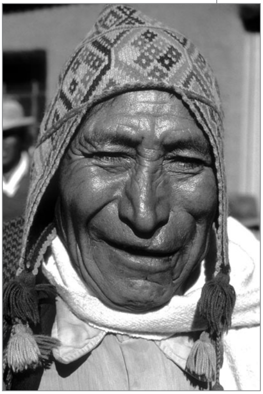


写真4

こちらは、アンデスの山の上で農業をしている人（写真4）です。標高3000メートルから4000メートルでは、かなり過酷な労働になるわけですね。そのためにコカの葉っぱを噛んでいるのです。この老人もコカの

葉を噛んでいる顔ですが、自然の中に生きている精悍さが感じられ、顔というものは、生活環境によって変わってくるものだと感じます。

次に、さまざまな表情の子どもの顔をお見せしましょう。

子どもというのは、この世に裸でオギャーと生まれてきたときは、みんな同じです。フランスの子どもだからとボンジュールと生まれてくるわけではない。日本人の子どもがこんにちはと言うわけではない。ギャーっと泣く、その泣いている声は全部同じだと思うのです。その子どもたちが、親の愛情の下に育ち、友だち、そして兄弟たちと遊ぶ中から、いろいろその国の言葉、民族の慣習、そういうものを覚えていって、だんだんその国の人間になるのだと思うのです。

写真5

これは1980年に、ソマリアから逃げてきた人たちを、エチオピアにある難民キャンプで撮った写真(写真5)です。決して恵まれたところで生活しているわけではないが、このお母さんの脛の上で、すやすや寝ている顔はなんともいえず幸せそうに見えます。やはり、親の肌のぬくもりに触れているときが、子どもにとっては一番幸せなときなのだろうと思いました。

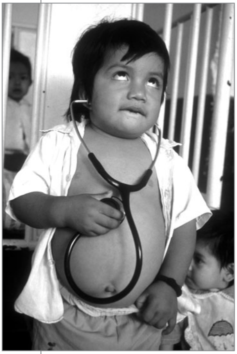


写真6

これは、ハンガリーの子ども(写真未掲載)で、私に「いないいないばあ」をして見せているところ。こちらは、アメリカの幼稚園のこども(写真未掲載)。鼻の中にクレヨンが入ったと、先生に見せているところです。親に見せたら嘆くのではないかと思うのですが、自慢げに見せているところがいいですね。

写真7

これは、グアテマラの小児病院。巡回してきた看護婦さんの聴診器を取って、自分の心臓に当ててびっくり仰天しているところ(写真6)です。ドッドッとそんなすごい音で血が流れているなんて、誰も思ってもみないですから、初めて聴いた心音にたまげてしまったのでしょう。

次の写真(未掲載)は、キスしているのではないんです。隣にいた子の口に噛みついているのです。左の子が遊んでいるところに、右の子が仲間に入れてもらおうと思ってちょっかいを出した。それに怒った左の子が噛みついたところなのです。

これは、チェコの学校帰りの子どもたち(写真7)。いじめっ子にいじ

められているところなのですね。子どもはよく喧嘩します。小さな喧嘩は遊びのうちで、それで社会のルールを覚えてゆくわけですね。それを全部親がとめてしまうと、喧嘩のルールひとつわからず、相手が動かなくなるまで殴ってしまう。それが、今の日本に起っている現象なのではないでしょうか。

このイギリスの幼稚園で撮った写真（未掲載）は、つねっているほうが女の子で、つねられているほうが男の子です。現代を象徴したようなシーンですが、右側の先生は、離せと怒っているのですが、女の子はそれを聞きながら、決して手を離さないのです。

子ども達の笑顔は本当に素晴らしいですね。子どもの笑顔を見て怒る人はいません。これはケニアのマサイの少女がメイクアップをしているところ（写真未掲載）です。女性というのは、いつの世でもこういうふうに自身を飾る習性があるのかもしれませんね。

これはブラジルのカーニバルに出てきた少女（写真未掲載）ですが、やはり化粧をして楽しんでいる。子どもは昼間スポーツクラブなどでカーニバルをやるのですが、夜中になると、お母さんたちがこういう格好して、また踊るのです。子どもは親が踊っている姿を見ていないのですが、ちゃんと同じようなことをしています。これは血の流れ、ＤＮＡかなあと思うのです。

ニュージーランドの小学校の写真（未掲載）には、マオリ族の子どもたちがいっぱい写っています。でも1時間授業を続けるのが不可能なのですね。途中でいやになってしまう。そこで、先生は30分ほどで伸びをさせて、気分転換を図っているところなのです。

こちらはイタリアの小学校（写真未掲載）です。1年生で算数の暗算をやっているのですが、真ん中の子だけが答えが出なくて、他の子たちが、まだかまだかって言っているところなのです。国の事情によって教育の形態が違います。しかし、どこの国も、子どもの教育には熱心です。それなりに一生懸命やっているように思えました。

この写真（写真8）は、2000年に黒柳徹子さんとアフガニスタンに行ったときに撮ったもので、タリバンが国土の90％くらいを支配していた頃です。タリバンは女性に教育をさせないので、女の子たちは学校へ行けなかった。これは難民キャンプの中にある学校で、タリバンの許可を得て、ユニセフが特別に開いた学校なのです。勉強させてもらえるというのは大変な喜びで、みんな目が輝いています。

写真８

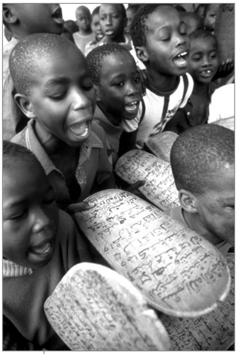


写真9

写真10

写真11

セネガル（写真9）では、普通の学校に行けない子どもは、この寺子屋のようなイスラムの宗教学校に行くのです。生徒がコーヒーの空き缶を持って托鉢に歩いて、その浄財で学校は成り立っているようでした。コーランがアラビア語で書いてあるのですが、この子どもたちは読めない。だからみんな暗誦をして覚えるのです。

これはモンゴルの子ども（写真10）。モンゴルもソ連圏の一員の時代には宗教は合法ではなかった。だからお寺に行って勉強することはできなかったのです。この写真は、自由化以降に撮ったもので、この子どもたちはお寺で、お坊さんになるための修行をしているところです。1軒に1人は必ずお坊さんになる人がいるというぐらい、お坊さんは憧れになっているようでした。

世界では1億3000万人にのぼる子どもたちが、学校に行けないで働いています。これはトンガの子ども（写真11）ですが、漁師が獲ってきたものを持って、村を売り歩くわけですね。売ったお金を漁師に渡して、その中からお駄賃をもらうのです。

これはタンザニアの写真（未掲載）です。この国も地方に行くと、たくさんの子どもが学校に行かないで親の手伝いをしていました。このように、幼いときから親の手伝いをしながら、生きる術を覚えていくのですね。いつ種を蒔いたらいいか、いつ刈り入れをしたらいいかと、仕事を手伝って自然に一人前の農業労働者になっていくのです。これは、黒柳さんとホーチミン市、昔のサイゴンに行ったときに撮った、ベトナムの少女の写真（未掲載）です。枯葉剤で、生まれたときから眼球がない少女です。盲学校で勉強しているのですが、最初から見えないので、すごくおおらかなんです。ところが、不発弾で手を失い全盲になった少女がいたのですが、こちらはほんとに暗い感じでした。やはり目が見えた世界を体験していて、失明するということは、大変な苦痛なのだと思います。

写真12

旧ユーゴスラビィア、クロアチアでの写真（写真12）です。リビックの小学校の壁ですが、これだけの数の弾が撃ち込まれているのです。10人のうち8人は、死ぬかと思うような体験をしている子どもたちなのです。

この写真は、エチオピアで撮影したソマリア難民（写真13）です。ソマリアでは部族同士の内紛で、もう戦国時代のようですね。兵隊たちが農民の食糧から翌年蒔く種まで、みんな略奪してしまう。もう生きる術がなくなり、越境してエチオピアに逃げてきているのです。子どもたちは、みんな栄養失調になる。そこに下痢が加わると命が危ない。この子どもも、もうそれに近いのです。骨と皮になっているのですが、こういう状態になっても、カメラを向けるとニコッと笑顔をするのです。とても辛かったです。

写真13

この子は一回目の湾岸戦争のときに撮った写真（写真14）です。病院なのですが、経済封鎖で医薬品が何もないのです。この子は、お母さんに抱かれて、何か懇願するような顔をしている。訴えたいことがあるのかも知れないが、もうしゃべれない。戦争というものは、大人が起す人災です。そのために子どもがこういうことになるということは、大変辛いことです。

写真14

この写真（未掲載）は、90年スーダン南部のジューバ郊外の難民キャンプの子どもです。最近はダルフールで、アラビア系のイスラムとアフリカ系のイスラムの人たちが紛争を起こしてたくさんの難民を出しています。80年に行ったときも、90年に行ったときも、同じような紛争が起こっていました。

この子はアフガニスタン（写真未掲載）。迫撃砲でお姉さんは死んでしまいました。弟は助かったのですが顔を負傷しました。こんな状況になれば、厭世的になってもおかしくないのですが、この子は希望を持ち前向きに生きているのです。子どもに生きるエネルギーを感じました。

この子はアンゴラで撮りました（写真15）。アンゴラでは、石油もダイアモンドも産出する。それをソ連とアメリカで取りっこして、ゲリラと政府軍がその代理戦争をやっていたのです。この子は、両親が目の前で殺されてしまった。さらに自分も両腕を切り落とされてしまったのです。僕らが施設を訪問した2時間くらいの間、この子は一度も笑顔を見せなかった。これも、また大人が起した人災の深いキズ跡なのです。

この少女（写真未掲載）は、チェルノブイリの原発事故に遭って、髪が生えなくなってしまったのです。ソ連に世話になったキューバが、治療のために、毎年自国に被爆者の子どもたちを呼んで被爆児童の治療をして

写真15

いたのです。この少女もその1人ですが、髪が生えるといっても、ぽやぽやとしか生えていないのです。私は少女の澄んだ瞳を見て、なんともやるせない気持ちでした。ベラルーシの放射能研究所の病院にはたくさんの子どもが入院して甲状腺ガンの手術を受けていました。とても痛ましい光景でした。

この地球上には、幸せな子どもも幸せでない子どももいます。不幸せな子どもの原因は何かというと、その原因の多くは戦争や内紛なのです。そして、人間が起した戦争という災害の、いちばんの被害者は子どもなのです。当たり前ですが、戦争を起さない世界をつくっていかなければいけないのです。戦争を起すのも人間だし、それを止められるのも人間であるということを、忘れないようにしていきたいと願っています。今までお見せしました人たちの顔には、その時代社会が映し出されているのです。

写真16

最後にこの写真（写真16）で締めくくりたいと思います。このおじいさんとおばあさん、顔は見えません。日本顔学会の共催するシンポジウムで顔が出ない写真を最後にご覧いただくことは、いささか気になったのですが、このふたり、顔が見えなくても、幸せに見えるではありませんか。こういう世界が人間にはあるのです。この老夫婦のような平和で幸せな世界をつくっていかなくてはいけないと、私は願っています。

人間は心です。心を写真は映すのです。

※ 掲載されている写真は、田沼氏が講演の際に投影されたご自身の作品です。
無断で転載または使用することはできません。
※ 紙面の都合上、講演の際に投影された写真の一部を割愛していることをご了承ください。

田沼 武能（たぬま たけよし）氏プロフィール

写真家・東京工芸大学芸術学部写真学科 名誉教授
1929年生まれ。東京都出身。49年東京写真工業専門学校卒業。サンニュース・フォトス入社、木村伊兵衛氏に師事。72年フリーランスとなる。84年黒柳徹子ユニセフ親善大使の初の親善訪問以来24年間同行するなど、世界中を駆け巡り、子供達の姿を撮影している。近著に「輝く瞳世界の子ども」「60億の肖像」「-学校に行けない-はたらく子どもたち」「難民キャンプの子供たち」「武蔵野讃歌」など多数。2008年1月には「真像残像」－ぼくの写真人生－（東京新聞社出版局）を上梓予定。
95年より日本写真家協会会長。79年モービル児童文化賞、85年菊池寛賞を受賞、90年紫綬褒章、2002年勲三等瑞宝章受章。03年文化功労者に顕彰される。日本を代表する写真家。

【ほとけの顔もなんとやら】

～仏像のお顔のはなし～

藪内 佐斗司先生　講演
YABUUCHI SATOSHI

はじめに

私は仏像の修理をしております。また彫刻家もやっております。彫刻家として、たくさんのひとの姿をつくってきました。童子や動物など、ありとあらゆるものを作ろうとしてきたわけです。しかし、本当のことを言えば、その奥にある命の本質は何だろうと探してきたように思われます。“こころとかたち”という言葉を、最近よく耳にするようになりましたが、形のむこうにあるもの、すなわち“こころ”が、実は瞳の奥に見えるのではないかなと思っています。ですから、作品の中で、瞳をとくに大切にしてまいりました。

そして仏像のお顔の話をさせていただくときに、どうしても避けて通れないのが、仏教的なお話です。こんなあたまをしておりますが、私は僧侶ではございません。特定の宗教や宗派に所属しているわけでもございませんので、私の勝手な解釈であることを、最初に申し上げておきます。

私の造る童子の背景と、それぞれの世界観

昔から、「山川草木悉有仏性」あるいは「草木国土悉皆成仏」ということばがあります。山も川も草も木も、この世の全てはほとけの一部であり、全ての存在は、この世で仮の姿をとっていて、必ず仮の姿から解放されるときがくる、すなわち成仏するという考えです。つまり、仏教で言う「ほとけ」とは、この世そのものと言い換えることができると思います。また、ほとけを如来ともいいますが、これは「如しのかなたより来るもの」という意味だと、私は思っています。

山というのは、ひとが山の如きものを、山と呼んでいるに過ぎない。同様に、川も海も雲も、人も獣も草も木も、その本質を呼ぶ言葉ではなく、すべてこの世の一部が、仮にそんな形をしているだけであり、それを、「そのような物」とひとが認識することで、初めて存在するというのが、仏教の世界観なのです。この点が「すべての存在は、全能の神がお創りになった」と考えるキリスト教などの一神教との最大の違いでしょう。

仏教的世界観では、この世はすべて仮の姿であり、何ものでもない

もの、何ものにもとらわれないもの、それがすなわち「空」(空は決して無ではありません)なのだということです。そして、その空なるものが、さまざまな形の生生流転する法則を仏法と名づけたのです。

この仏法を深いところで感じる事の出来た人を「仏陀」、即ち悟りを得たひとということです。ですから仏陀は必ずしも釈尊ひとりではなく、今までに何人も存在すると仏教ではいっていますし、また、これからも現れると説いています。

私の造る童子たちは、その如来、つまり如しの彼方からやってくる"こころのちから"といいますか、生成発展の源となるエネルギーを象徴しているのです。

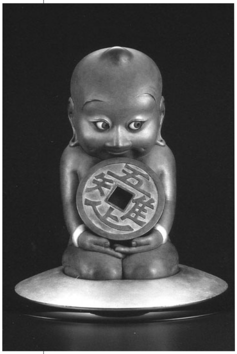


写真1 守銭童子

これは私が造りました「守銭童子」(写真1)です。「吾、唯足るを知る」というのは、遺教経(ゆいきょうぎょう)というお釈迦さんの遺言の中に出てくる言葉がありますが、これは足るを知れば、全てが幸せになる、苦から逃れられますよという意味なのです。それをこの童子が教えてくれているということです。

私の造っている童子は、このようにだいたいはだかんぼうの男の子です。童(わらべ)の子と書いて童子(どうじ)といいますが、この言葉は日本の長い歴史の中に、酒呑童子、茨城童子など、いろいろな童子が出てまいります。これは必ずしも子どもではなく、大人も含まれます。要するに、社会のアウトサイダーを童子と呼んでいたのですね。

その童子の性格付けをずっとしていきますと、私は異界からやってきた人たちという感じを持ちました。そして、徐々にそれを広げていきますと、われわれの全て、人間も動物も、そういったものの背後には、全部童子がいるのではないかと思えるようになっていきました。言い換えれば、この世の全てのものの中には、生生流転のエネルギーが潜んでいるということではないでしょうか。

ほとけさまの種類について

仏様にはいろいろな種類があり、とても複雑で、専門的に学んだ方でないとよくわからないものです。そこで、いちばん簡単にお話いたしますと、仏像の種類というのは、釈迦をモデルにした像か、それ以外の像の２種類しかありません。

では、釈迦の像とは何かというと、いわゆる○○如来とか、○○菩薩とか、○○明王という、この3つの名前をつけてあるのは、釈迦がさまざまに変容された姿の像なのです。

そのほか、四天王や神将、大黒天とか弁財天とか吉祥天などの天が

つく神さまの像や、それに仁王さまなどは、釈迦ではなくて、いずれも釈迦の教えに帰依した異教の神々や聖人を象徴したものなのです。

如来とは、衆生救済の願いを成就し、この世の実相を看破して、悟りを開いたひとのことをいいます。持ち物や印相という手の形で、その如来の性格や作用の違いを表現していますが、仏教において、釈迦以外の如来、阿弥陀や薬師が生み出された過程は、実はあまりよくわかっていません。釈迦の教えに近い原始仏教には、釈迦以外の如来は存在しなかったのであります。

基本的には、如来様は三種類と覚えていただければいいと思います。

如来の中でも宇治の平等院にある阿弥陀如来（写真2）は、日本人が考える典型的な如来様であります。日本史でいうと平安時代の末ですね。そして、左手に薬の壷を持っているのが、お薬師さん。薬師如来です。それから室生寺にある、釈迦如来。

釈迦如来は実際に2500年前に北インドに住んでおられた、1人の偉い人の肖像であるわけです。

仏教がつくられた北インドから見て、西の彼方にいるのが阿弥陀さん、東の彼方にいるのがお薬師さんというふうに考えられています。

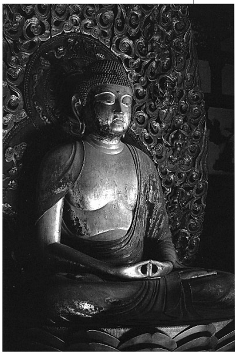


写真2
平等院鳳凰堂 阿弥陀如来

一神教の場合は、この世には1人の創造主しかいないと考えますが、仏教では成立当初から、東の彼方には、お薬師さんが治めている浄土がある。また西の彼方には阿弥陀さんが治めている浄土があるというように、もともと多元的な宗教であったと考えられるのです。

ここでちょっと世界地図を思い出してください。インドを中心に西には、アラビア海を経てエジプトがありますね。これは、私の考えなのですが、お釈迦さんの時代に、西の彼方に阿弥陀さんの国があるんだよ、というのは、古代エジプトまたは古代メソポタミアの文明を連想したのではないかと思うのです。

また、お薬師さんは、インドから東の彼方です。ここは東南アジアや中国がありますよね。多分、古代インドの人たちは、何らかの情報源を持って、東の彼方には中国というすごい文明があるのだということを知っていたのではないかと考えています。

東の彼方というと、東からはお日様が出てくるのですね。ですから、東の彼方のお薬師さんというのは遣送仏（けんそうぶつ）、太陽を送り出す仏さんだということになるわけです。東のお薬師さんの浄土からずうっとお日様が上がってきて、われわれのお釈迦さんが治めているこの世で、中天に太陽があがる。そして、西の彼方に沈んでいく。ここ

に、太陽を毎日毎日お迎えする国がある。これが阿弥陀浄土だというふうに考えたわけです。

当然、お薬師さんというのは、非常にエネルギッシュであります。薬師・瑠璃光如来といって、明け方の青い瑠璃色が薬師の色です。一方、阿弥陀さんは、西の彼方の夕日の色です。夕日の黄金色が阿弥陀さんの色なのです。そんなことをちょっと覚えておいてください。

図1
向源寺 十一面観音

次は菩薩さんのお話です。

観音様に代表されるこうしたお像を菩薩といいます。この滋賀県向源寺の十一面観音(図1)は、非常に美しいお像で有名です。菩薩さんというのは何なのだろうかというと、如来になる前の、衆生救済の大きな願いを持って、修行をしている状態をあらわします。

釈迦の一生でいうと、王子の時代です。したがって、髪型や装飾品は王族としてのものです。高く髻を結い、冠を被り、耳飾りをつけています。腕釧、臂釧、足訓という飾りをつけています。そして如来になるときに、そういう飾りを全部とったのです。如来の耳たぶに大きな穴が開いているのは、その耳飾りをしていた名残なのです。

菩薩は、利他という実践を伴わなければなりません。これが大乗といい、したがって小乗仏教では、菩薩信仰は発達しませんでした。小乗仏教の国である東南アジア諸国の寺院には、釈迦の像ばかりで、観音様もお地蔵様も奉られていません。

よくこの観音様が男か女かと質問されますが、釈迦の姿を象ったものであるという解釈からすると、明らかに男性です。しかしカトリックにおいて、マリア信仰が起ったように、仏教でも女性的仏像が求められたのでしょう。観音様に代表される菩薩の慈悲の功徳に母性を感じて、女性的な菩薩像が意図的に造られたことは、大いに考えられることです。

写真3 神護寺 愛染明王

如来の次に菩薩がいて、次はこんなこわい顔をされた明王さんです。これは、菩薩が人々を救おうとして、必死になっているときの形相ですので、菩薩の変容したものと解釈できます。不動明王、愛染明王(写真3)、こんな角みたいなのを生やしていて、いかにもこわいですよね。でも実はこれ、角ではなく、髪の毛なのです。本当は、この天冠台(てんかんだい)という、冠を支える頭の輪の中に、きちんと納まっているものなのです。ところが、「何しとるんや!」と髪の毛を振り乱して叱っているわけですよ。その振り乱した髪が冠からほどけている状態を表しているのです。つまり、如来や菩薩が叱ってい

るときは、明王になるわけで、いずれもお釈迦様のお姿であるのです。

今度は、お釈迦様でない像の人たちがいったい誰か、と言うお話を少ししましょう。四天王や仁王様、またさまざまな異教の神々の像があります。

これは有名な東大寺戒壇堂の四天王（写真未掲載）ですね。四隅を守っています。実際仏典の中には、東西南北から王様が、それぞれ何百人、何千人という眷属（けんぞく）を連れてやって来て、お釈迦様の教えに帰依したという記録が残っております。歴史的事実かどうかはわかりませんが、叙事詩としては残っております。そういう人たちを象徴して、四天王が生まれたのでしょう。ですから、お釈迦様の像の周りに四天王がおられることが多い。

お薬師さんには、12方位を守る12人の神将様が、その周りにいると考えられております。左右には、お日様とお月様の象徴である日光、月光菩薩が脇を固めています。みんなそれぞれ、自分が帰依した如来様を守っているので、むちゃくちゃ並んでいるわけではないのです。お寺の中にいる仏像は、そういう仏典の根拠があって並んでいるのです。

これは東大寺の仁王様（写真未掲載）で、お寺の山門の左右におられて、ややこしいやつが来ないようにと、こんな怖い顔をして怒っているのです。

左側は空手の格好をして、「あ」というような口を開けて、身体の中の悪い空気を「はっ」と吐き出している姿です。一方、右側は「うん」と言って、鼻の穴から新鮮な空気を「にゅっ」と吸い込んでいるのです。この阿吽（あうん）というのは、空気の出入りを示しているわけですね。

こちらは阿修羅さん（写真未掲載）です。阿修羅さんというのは、インドの神様です。インドでは梵天、あるいは帝釈天と呼ばれている神様もいて、バラモン教やヒンズー教などの古代インドの神話では、善なる神とされています。それに対し、悪なる神、阿修羅というのが存在しまして、これがお互い喧嘩ばかりしているのです。喧嘩することで、この世が生生流転していくという考え方があるわけです。

ところが仏教では、この梵天帝釈も阿修羅も、自分たちの仏教の中に取り込んで、その争いごとをうまくとりまとめたということになっているのです。

ですから、争いの神様の阿修羅も、ギリシャ神話の闘争の神マルスのような怖い顔はしていません。こんな優しい顔をしているのです。これはやはり、仏教に帰依して、ようやく喧嘩に明け暮れた生活から逃れられたという、安堵感があるのではないかと思います。雑誌等のアンケートで、仏像の人気投票をすると、必ず上位に入っていて人気がある像です。

ほとけさまのお顔

図2　阿弥陀如来

ざっと仏像史を見てまいりました。整理をつけたところで、いよいよお顔の話に移りたいと思います。

こちらは阿弥陀如来です。(図2)

まず、頭のいちばん上からいきましょう。頭の上にポコンとしたお餅のような形がありますね。これを肉髻(にっけい)といいます。けっして頭が盛り上がっているのではありません。

バラモン教を起源とするインドのシーク教徒は、白いターバンを巻いていますが、あれを取ると、3メートルくらいの髪の毛があるそうです。それをぐるぐる巻いて三つ編みにして、その上にあのターバンを被せている。多分2000年前も、王族や上層階級の人たちは、髻を高く結い上げて美しく装飾していたのでしょうが、貧しい人や修行者たちは、このように長い髪をぐるぐる巻きにしていたのでしょう。これが徐々に意匠化され、お椀のような肉髻になっていったと考えられます。

頭の上のところにある小さな渦のようなものは、縮毛状態の毛で、螺髪(らほつ)といいます。日本の仏像はほとんどが螺髪で表現されますが、中国などでは必ずしもそうではなく、縄状の髪をぐるぐる巻きつけているように表現されているものもあります。

肉髻の下の部分を地髪(じはつ)といいます。肉髻と地髪の境目に、赤い大きな珠があり、これを肉髻珠といいます。これは頭皮で、螺髪の間から皮膚が見えているところといわれています。あるひとの説によると、お釈迦様は頭のてっぺんの頭皮がみえていたので、それを象徴化したものであるということです。たしかにそのような絵画や彫刻が残っていますが、釈迦在世中のものではありませんので、真相はわかりません。髪の毛と額の境目を髪際(はっさい)といいます。

図3 大日如来

こちらは大日如来のお顔(図3)です。

額に丸いイボのような物がありますが、これを白毫(びゃくごう)といいます。だいたいは水晶の玉をここに入れて、ピカピカ光らせています。これは、何かと申しますと、1本の白くて長い毛が、お釈迦様の眉間に生えていたという話を象徴的に表現したものです。

それがぴゅーと伸びていたり、またピロンと返ってきたりしたそうです。また、インドでは牛を大事にしていますが、お釈迦様も牛のように長い舌でご自分の顔と頭を舐めることができたといいます。お釈迦様はとってもシュールなのです。

顔と体は金色に光り輝いていたといいます。仏像を金箔や金メッキで覆うのはそのためです。光背も光り輝くオーラを表現したものです。

眉毛は細長いですね。絵で描くときは、まず眉毛の形を群青の絵の具でシャドーを描き、中心に墨で一本線を入れます。

目は切れ長です。インドや西域、中国北部の仏像は、二重まぶたが多いのですが、わが国の仏像の多くは、一重まぶたがほとんどです。目頭と目尻には、青い色を少し着けます。そして目の瞳の虹彩は、赤あるいはベンガラ色という赤系の色を使います。

口元は、こんなふうに、人中（じんちゅう）という上唇の真ん中の盛り上がりが、くっきりして非常に発達しています。

どんなに女っぽい表現をされていても、基本的に男ですからなまずみたいな髭が生えているのですね。

顎はだいたい二重顎になっております。首には三道といいまして、3本の線が入っています。

もうひとつ重要なのが、耳たぶ。だいたい仏さんは耳は大きく縦に長く、耳たぶに大きな穴が開いています。菩薩は王族の時代の釈迦ですからおおきなピアスのような耳飾りをつけていたわけで、出家してからの如来の像には穴だけが開いていることになります。

仏像におけるお顔の変遷

インドではお釈迦様が亡くなった当時は大変神格化され、その姿を絵や彫像であらわすことが禁止されました。ですから、生前のお釈迦様の姿を知る造形物はまったくありません。最初は、輪宝や足跡などで、その存在を示すだけでした。今も、その名残として、寺院には輪宝紋がよく見られますし、仏足石もありますね。

その後、釈迦の像、すなわち仏像が描かれ彫刻されるようになったのは、紀元前1世紀頃といわれています。サーンチーの大塔が造られたのが、この時代です。

その後、インド北部のヤムナー河流域のマトゥラー地域と、今のパキスタンあたりのガンダーラ地域で、ほぼ同時に仏像が造られるようになりました。

この頃のインド中部地区は、まだアーリア系民族との混淆が進んでいなかったとみえ、マトゥラーに見られるこの時代の仏像のお顔は、アジア的な顔立ちをしています。

一方で、アレキサンダーの遠征でヨーロッパ人の侵攻を受けたガンダーラ地方の仏像は、今のアラブ系の人のように、彫りの深い顔をしています。

著作権・所有権等の
都合により掲載して
おりません

写真4 法隆寺 釈迦三尊像

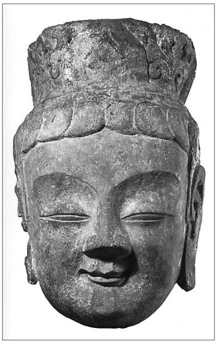


写真5 北魏系の仏像

飛鳥〜天平のお顔

これは法隆寺の釈迦三尊像（写真4）ですが、北魏のお釈迦さんの顔とよく似ています。北魏系の仏像（写真5）の特徴いわゆるアルカイックスマイルで、日本の飛鳥時代に造られた仏像は、この影響を強く受けています。

これは中国の唐の時代のお顔（写真6）です。日本の天平時代の仏師は、この唐の時代のお顔をうまく真似ているわけですね。これは中国の龍門の仏像（写真未掲載）ですが、東大寺の大仏様の天平時代のお顔は、こんなお顔だったのではないかと、美術史家は言っております。

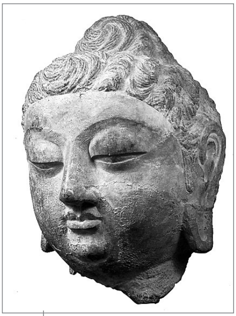


写真6 唐の時代の仏像

これは東大寺の日光菩薩、そして東大寺・盧舎那仏（るしゃなぶつ）（写真未掲載）。これは中国の唐の時代の仏像の姿をとっているわけですね。韓国の南部のお寺にある仏国様もまた、同じようなお顔をしています。

日本の仏像のお顔裏話

これは、広隆寺の弥勒菩薩のお顔（写真未掲載）です。最も早く国宝に指定された仏像として知られていますけれど、実はこれ、明治時代に大々的に修理をしております。そのとき、ほとんど造り直されているのですね。本当はもっともっと厳しい顔をしていたと思います。韓国の中央国立博物館に、これとそっくりの像がありますが、もっともっときつい顔をしています。こんなに穏やかな顔ではない。

つまり弥勒菩薩のお顔は、幕末から明治のはじめにかけての仏師が造った顔だとお考えいただいたほうがいいと思います。それが、1500年生きてきたこのお像の、1つの歴史であると言えるのではないでしょうか。

写真7 旧東金堂本尊佛頭

これは、旧東金堂本尊佛頭（写真7）です。この像は、飛鳥時代の次の白鳳時代に造られた傑作ですが、頭部と体部がありません。元々は蘇我倉山田石川麻呂のために、685年に飛鳥に創建された山田寺講堂の本尊として造立されました。その後藤原氏の氏寺である興福寺の堂衆によって奪取され、火災にも遭い、1937年に興福寺東金堂修理の際に、偶然発見されたもので

す。そんな数奇な歴史を持ったお像ですが、とにかく素晴らしい像です。

そして次は、これも日本を代表する聖林寺十一面観音（写真未掲載）です。これは、三輪山を御神体とする三輪大明神のご本尊だったのです。ところが明治のはじめの神仏分離のときに、神社にこんな仏像があるとは何事だと壊されそうになったので、地元の人たちが穴を掘って埋めてしまったのです。そのお陰で、今これだけ素晴らしい天平時代の像が残っておるわけです。これも先ほどの唐の様式を持っています。

こちらは秋篠寺の伎芸天（ぎげいてん）（写真8）、有名ですね。実は頭部と体が造られた時代が違うのです。頭部は天平時代、しかも乾漆（かんしつ）という漆の張子で造られています。この秋篠寺というお寺は、源平の戦いのとき、東大寺や興福寺が焼けたときにいっしょに焼けてしまったのです。そのとき、このお像も焼けてしまったのですが、奇跡的に顔だけが残ったのです。それに、鎌倉時代になんとかお体をつけたのです。頭部は漆ですが、体は木で造られています。

著作権・所有権等の都合により掲載しておりません

写真8 秋篠寺 伎芸天

ですから彫刻家の目から見ると、やはりどこか不自然なところがあります。でも、その不自然なのが魅力なのでしょうね。ちょっと危なっかしいバランスで立っている姿に、昔から大ファンが多いお像です。

平安時代の仏像のお顔

天平時代までの仏像は国家を保護し、国を豊かにするため大変ポジティブなイメージで制作されました。しかし、平安時代になって密教が入ってくると、お顔が変わってきます。密教というのは、密室の中で僧侶と仏像が一対一の真剣勝負で行う炎の行法を通じて、怨霊を鎮めたり、超能力を示す道具として機能したのです。ですから、平安時代初期の仏像（写真9）というのは、大変厳しいお顔をしているのです。

著作権・所有権等の都合により掲載しておりません

写真9 神護寺 薬師如来

そのずっと後の、平安時代末になると、この世が実際に戦乱の世になってきます。そうなると今度は、この世から阿弥陀様がいるところへ逃げていきたい、ということになるわけです。安心立命（あんじんりゅうめい）、ほっとしたいという気持ちですね。それで、癒しの心に満ち溢れた、平安時代末のお顔（写真10）になってくるのです。

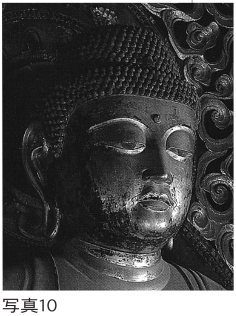


写真10
平等院鳳凰堂 阿弥陀如来

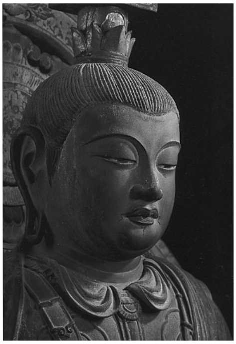


写真11 興福寺東金堂
文殊菩薩坐像

日本人が考える仏像というのは、だいたい平安時代末のこの穏やかな顔の仏像を指します。

鎌倉時代の仏像のお顔

次の鎌倉時代になりますと、運慶、快慶で知られる慶派一門が造った男前の像（写真11）がズラーッと並んできます。鎌倉時代は武士の時代、すなわち男の時代でした。この時代に仏像が求められたのは、もののふの美学であったと思います。もう男も女もしびれるような男前の仏像がいっぱい造られた時代なのです。

ざっと駆け足で、日本の仏像のお顔の歴史を追ってまいりました。

最後に東大寺の大仏様（写真未掲載）のお話をしましょう。これは、造られてから1250年経ちますが、そのときに造られたままのお像ではないのです。東大寺は何度も何度も焼けております。そのたびに顔が落ちるのです。実は、この東大寺の大仏様は、当初、龍門の石窟にあった仏像のようなお顔をしておられたのだろうと思います。それが源平の戦いで平重衡（たいらのしげひら） が東大寺を焼いたときに、首が落ち、上半身と手が溶けてなくなります。その後、源頼朝が鎌倉幕府を開くと、すぐに大仏様を復興するのです。

それで有名なのが、あの弁慶が読み上げた勧進帳であります。東大寺復興のために寄付してくださいと、そういうお坊さんが全国に散ってお金を集めたわけです。それで大仏様が復興されたのですが、それを手がけたのが平安時代末の仏師だったので、穏やかな定朝（じょうちょう）のような丸いお顔になったと考えられます。開眼法要のときに、そのお姿を初めて見たお坊さんが、「ちょっと違いますな」と言ったことが日記に書かれています。それまで天平時代のお顔をずっと見てきた人たちから見ると、平安時代の穏やかなお顔が乗ったとき、違和感を感じたらしいですね。

その後、戦国時代にもう一回焼けます。そのときは大変な被害を被ります。首はもちろん、体も落ちます。残ったのは大仏の蓮弁（れんべん）と膝頭ぐらいです。でも、どうしても大仏様だけは復興したいとお体を造るのですが、これはもう鋳掛け修理（いかけしゅうり）といって、継ぎ接ぎだらけなのですね。

しかし、お金が足りなくなって、顔まで造れなかったのです。でも、それでは、あまりにも痛ましいというので、木で顔を造り、その上に銅版を貼っていた時代が20年くらいあるのです。しかも資金不足で大仏殿という建物もなかった。鎌倉の大仏のように露座で立っていたというのですね。

ところが元禄時代になって、世の中が安定しお金がだぶついてきた。そこでこの大仏さんのお顔も新しくしましょうといって出来たのが、今の４代目の大仏さんのお顔なのです。

私はこれまで、いろいろな仏像を見てきました。いろいろな仏像を修理してきました。その中でいちばん好きなのは、東大寺のこの大仏さんなのですね。というのは、1250年という日本の歴史を、この仏様がひとりで体現しておられる。しかも、そのお顔は4代目であるということを考えると、日本人がその1250年の間、いったい何をしてきたかを考えるとてもいい素材になると思うからなのです。

大変駆け足になりましたけれども、京都・奈良にお出かけになったときは、そんな仏様のお顔のことを思い出して仏像を見ていただきますと、おもしろいのではないかと思います。

掲載写真出典

写真 2・10　平等院 鳳凰堂阿弥陀如来坐像（国宝）
新潮社「仏像の見分け方」P 57より。（西村公朝・小川光三 著）

写真 3　神護寺 愛染明王坐像（重要文化財）
至文堂 日本の美術9 No.379「愛染明王像」より。東京国立博物館蔵 康円作
Image：TNM Image Archives Source: http://TnmArchives.jp/

写真 4　法隆寺 釈迦三尊像（国宝）
毎日新聞社 魅惑の仏像3「奈良・法隆寺 釈迦三尊」より。

写真 5　菩薩頭部
MIHO MUSEUM 図録「龍門石窟展」より。大阪市立美術館蔵

写真 6　如来頭部
MIHO MUSEUM 図録「龍門石窟展」より。大阪市立美術館蔵

写真 7　興福寺 旧東金堂本尊佛頭（国宝）
山と渓谷社 山渓カラー名鑑「仏像」より。

写真 8　秋篠寺 伎芸天（重要文化財）
山と渓谷社 山渓カラー名鑑「仏像」より。

写真 9　神護寺 薬師如来像（国宝）
山と渓谷社 山渓カラー名鑑「仏像」より。

写真11　興福寺 東金堂文殊菩薩坐像（国宝）
山と渓谷社 山渓カラー名鑑「仏像」より。

籔内 佐斗司（やぶうち さとし）氏プロフィール

彫刻家・東京藝術大学大学院美術研究科 文化財保存学 教授
1953年生まれ。大阪市出身。78年東京芸術大学美術学部彫刻科卒業。80年同大学大学院美術研究科修了。82〜87年同大学保存修復技術研究室助手を勤め、仏像や古美術の古典技法と修復技術を研究し、数々の保存修復事業に参加。この豊かな経験と確かな技術を駆使した木彫作品を通じて、日本人の心象風景や東洋的自然観を暖かく穏やかな造形で表現している。そして滑稽さと諧謔に満ちた奇想天外な作品世界は観る人を魅了してやまない。

【ゼロ“0”の顔】

三林 京子先生　講演
MITSUBAYASHI KYOKO

ゼロの顔とは

私たち演じる側というのは、常に皆さんの前で、いいお顔をしようと、そう意識しているわけでございます。

ところが、その前の段階で、どうしよう、どうしようと考えたりしている時というのは、当然、何も人目を意識していない顔になりますね。それが、私は私流の「ゼロの顔」だと思っているのです。

このゼロの顔が、きれい、優しい、そういう人が私は信頼できる人だと思うのです。女優なら、大成している人や、ヒロインをなさっている人は、このゼロの顔がきれいなのです。

私は、それがダメなのです。ゼロの顔が怖いのです。いちばんそれが出るのが、お稽古をしているときです。私の場合、ずっと師匠とマンツーマンで稽古をしてきて、その間はとにかく必死なので、師匠にいい顔を見せようとか、そんなことは考えられないのです。たくさん稽古をしていただいて、できたものをここで最高によく見せようという気持ちがはたらくことはございますが、師匠の前で、顔をよく見せようなんて、思ってもしようがないわけですね。もう、見破られているわけですから。

あるものを全部、必死に出していくときの、そういう時の私の顔が、怖いと言われるのです。「敵討ちに行くんやないから」と。自分では必死ですからわかりませんが、どんな顔をしているのかしらと、ちょっと見てみたい気はします。

最近、それに近いものを見てしまいました。こういうところで、お話をさせてもらっているとき、一生懸命話しますよね。ところが、その講演の写真を見せてもらったら、怖い顔をしてしゃべっているのですね。

私の怖いと言われる顔はこういう顔なのかな、と思ったのですが、演じている時は、お客様の目やカメラマンの目とかがございますから、やはりどこか違うのですね。でも、三林京子なり落語家の桂すずめとして、お客様の前でやればやるほど、一生懸命になればなるほど、それがゼロの顔に近づくわけです。

このゼロの顔がいいお顔だと、もうこれで演者の良し悪し、値打ち、そういうものが決まるのではないでしょうか。しかし、持って生まれたゼロの顔がいい人はよしとして、このゼロの顔も、ゼロの顔といえども、

変わると思うのです。どう変わるかというと、ゼロの顔（何も意識していない）の時に、何を思っているかということで、変わってくるのです。

例えば、あいつを利用して、あれを騙して、あそこからカネ引っ張ってきて、みたいなことをずっと思っていますと、とても怖い顔になってくると思うのです。そして、それを隠そうとして、もっと怖い顔になってしまう。この怖い顔が普段の顔になっている方、いらっしゃるでしょ。よく観察してみてください。普通の顔がそうなってしまった人、いらっしゃいますよ（笑）。

反対に悪いことを何も考えずに、にこにこ笑って、普段から先ほどのお釈迦様とか菩薩様のような顔でいると、おばあちゃんになっても、シワがあっても可愛らしい顔になるのですね。

顔とはそういうものなのだ、と最近感じて、今は怖い顔ですから、ああいう仏様のような顔や、邪気の無い子どものような優しい顔に、なんとか戻れないものか、というのが、私の課題なのです。

私は欲張りなことや、欲深いことを、いっぱい考えていますから、絶対にへんな顔しているだろうな。やだな、と思っています。でも、今は修行の段階を経ているわけですから、こんなときもあっていいかな、とも。

でも、あと10年、そのまた10年たったときには、自分の顔がちょっとでもいい感じになっていて欲しいですね。二重顎と首の三重シワだけは、今でもすでにお釈迦様に近づいてきていますけれど（笑）。

顔を見ればお見通し

今年から演劇志望の大学生たちに、演劇の演習をしています。今1年生は26人いますが、目が十分行き届くには、少し多いですね。ところで、学生たちに教えるようになってから、ひとつ教わったことがあるのです。それは、ちゃんとやっているかいないか、すぐに顔でわかることです。

私もこれまで、いかにも練習してきました、みたいな顔をしてお三味線の稽古に行っていたのですが、今思えば、師匠はすっかりお見通しだったのですね。稽古していかなかった時に限っていけずな稽古をするので、なんて嫌な師匠かしらと思っていましたが、ちゃんとこちらの不勉強を見抜いていたのです。そういえば、私が稽古してきたかどうかなんて、襖を開けて入った時にわかると、師匠が言っていらしたことがありました。それくらい私は正直で、ポーカーフェイスができないのですね。

そのうち、「三林さん、お腹空いています？」と、言われるようになりました。もうお腹が空いてきたら散漫になるらしく、そのときはこちらの空腹がどうしてわかるのだろうと思っていましたが、自分が教壇に立ってみて、それがはじめてわかりました。

「やってます」と口で言っても、顔がやっていないと言っているのです

ね。では「やってごらん」と言ってみると、その子はやっぱりできないのです。うわあ、人間の顔って怖いな、と思いました。また、その反対に、19や20歳でまんまと人を騙しおおせるような子だったら、これも怖いですけれど。

その反対に、私が学生さんのお顔を見てわかるのと同じように、向こうも私のことが全部わかっているかもしれないと思うと、授業のたびに、冷や汗ものなのです。ですから、勉強しないとついていけないな、大変な仕事を引き受けてしまったなあと実は思っているのです。

まずは挨拶から

その一方で、よく神様は、この仕事を私に与えてくださったな、という気持ちもあるのです。こんなことでもない限り、私は勉強しませんから。どちらかというと、私が女子大生になって、気楽に勉強させてもらいたかったくらいなのです。まさか自分が先生になるとは夢にも思っていなかったので、これも経験だと思ってやらせてもらっております。

クラスに男の子は残念ながら2人しかいなくて、あとは全部女の子。4月から始まって、挨拶を教えているのですが、まだ習得できません。近くに来て「おはようございます」「こんにちは」という挨拶はもちろんできるようになったのですが、浴衣を着て、畳に座り手をついて「おはようございます。よろしくお願いいたします」という挨拶ができないのです。

練習をしてきなさいと言っても、家の中に畳がないという方も何人かいらっしゃるのです。畳でないところで、縁（へり）を踏まずに歩く練習もできないので、フローリングの部屋でもいいから、とにかく毎日浴衣を着て、浴衣を畳んで、立って座って、お父さんとお母さんに「おはようございます」と言えるようになったら、自分が変わるからね、と教えているのです。でも、あまりやっていないらしく、いまだにそれができないのです。

とにかく、それができるようにならないと、先に進めないので困るのです。日常のことができなかったら、非日常のことなど、とてもできません。立って座って挨拶することができなかったら、もう次の動作はまず出来ないといっていいのです。

最初にカリキュラムを組んで、いろいろやろうと思っていたのですが、全部なしになって、前期はとにかく挨拶だけ。会社に入ってきた新入社員が、いろいろな挨拶や言葉遣いを研修して、社員としてひとり立ちできるようになるまで最低3ヶ月、長い子で半年かかるというのを何かで聞いたことがあるのですが、そのくらいはもしかしたら、かかるかもしれないなと、今思っているところです。

それは、デッサンをちゃんとできなかったら、次に絵を描けないのと同じなのではないかと思うのです。ですから、挨拶をとにかくちゃんとできるようになったら、次に進もうとしたのです。

そうしましたところ、ある教授から、2人の学生が授業の前に「おはようございます。お願いいたします」と、挨拶に来たことを聞いたのです。教授が挨拶の理由をその2人の学生に尋ねたところ、「三林先生にするように言われた」と答えたそうです。たしかに、芸能界に入って稽古場に行ったら、全員に挨拶をしなくてはならないのですから、それを今から訓練しておくと、あとが楽になるという意味で、どこの教室に行ってもやりなさい。教授にもちゃんと挨拶しなさいと言ったことがありました。

そうしたら、その先生が「こんなこと僕がこの大学に来て初めてですよ。誰も挨拶をしたことない。気持ちよろしいなあ」と言ってくださったのです。

私はその子たちのお陰で褒められて嬉しかったので、今度は授業で「こういう子がいましたよ。」と話したら、それに他の子たちも刺激を受けたらしく、みんなが挨拶を始めたようなのです。

それで、先日大学の事務局に行ったら、「三林先生のお陰で活気が出てきて、みんなで挨拶してくれるのですよ」と、ベテランの女性の方からもお褒めの言葉をいただきました。

一所懸命苦労して、こうして認められる、こんなに嬉しいこともあるのだなあとつくづく思い、またその気持ちを学生たちに伝えました。

それを私が話したときの、みんなの表情がまたすごい。実際は挨拶をしていない子もいるのですが、みんな自分がやったみたいな嬉しそうな顔をしてくれましてね。「みんなのお陰で、私褒められたよ、ありがとう」と言ったら、みんなが「私のお陰よ」みたいな顔をしているのです。これがきっかけで、今度は今まで挨拶していなかった子もきっとやってくれるのだろうな、という期待を持って見ています。

最後に

教室に入った時に、ここにいらっしゃる皆さんのように、ふわーっといい顔しているな、と思う子もいます。今教えている学生たち全員の顔1つ1つが、私にとって菩薩様であり、お地蔵様であり、阿弥陀様であり、というふうに見えるようになれば、こんなに嬉しいことはありません。反対に、あの子ちょっと大丈夫かな、というような子が出てきたらどうしよう、と不安ももちろんあります。

それと同時に、私も常日ごろから、変なことは考えずに、ゼロの顔が、早く怖くなくなるように精進しようと思います。無意識にしているとき

の顔が、ああ、いい顔しているなあ、と言われるようになるのが、夢でございます。考えていることがいけないと、みんな顔に出てきますから、いい顔になるというのも大変なことだなあ、とつくづく思うのであります。

私、これから100歳まで、現役でいきたいと思っておりますので、まだあと、45年くらい残っています。これはつまり、あと45年修行できるということですね。その最後には、光り輝くようなおばあちゃんになって、棺桶に入るときは、ぜひともいい顔して入りたいなと思っております。

三林 京子（みつばやし きょうこ）氏プロフィール

女優・落語家・大阪芸術大学短期大学部広報科 専任教授
1951年生まれ。大阪市出身。70年芸術座「女坂」で初舞台。75年NHK大河ドラマでTVデビュー。女優業のかたわら、98年に桂米朝門下、桂すずめの名で落語家デビュー。社会活動も精力的で、03年文化審議会国語文科会臨時委員等、多方面で活躍中。

全体パネルトーク

・パネリスト

原島　博・田沼　武能・籔内　佐斗司・三林　京子

・司会

頼近　美津子

頼近　他の先生方のお話を聴かれたところで、まず御意見をお聞かせいただきたいと思います。

田沼　籔内先生の解説で、仏様の分類がよくわかり大変勉強になりました。三林先生の挨拶についてのお話ですが、私も以前学校で教えたことがありましたが、教えるのはなかなか難しいですね。今の時代に若者と向き合うには、こちらも時代の違いを覚悟をしなくてはならないことをあらためて勉強させていただきました。

頼近　原島先生、いちばん最初に、この三人の講師の演題3本柱を立てて、お話くださいましたが、お聴きになられた後の感想はいかがでしょう。

原島　顔学会に関係していてよかったなと、正直思いました。顔学会に関係していなければ、今日この3人のお話も聴けなかったですし、また初対面でありながら、これだけ楽しい会がすぐにできてしまうのも、顔という話題の魅力だと思うのですね。

やはり顔というのは万国、万人の共通語ですよね。どういう専門であろうが、どこかで皆顔に関係する。顔の話をすれば、すぐ仲良くなれますよね。

頼近　今日はお顔の魅力などについて、さまざまな視点からお話をいただいておりますが、会場から「いいお顔」というのは、どういうお顔をいうのでしょうか、という質問がきておりますが。

原島　ちょっと籔内先生にお聞きしたいのですが、仏像のような顔を

した本当の人というのは、いい顔ですか。

籔内　いたらびっくりするでしょうね。

原島　そうですよね。では、どうして仏像ではよくて、本当の人がそういう顔だったら、びっくりするのでしょう。

籔内　日本人がいちばん好きで、日本の仏像の中で代表的な如来様の顔は、先程お見せした平安時代末の阿弥陀さんなのですが、あの仏像をインドの人が見たら、腫れぼったくて、年中病気している人の顔だと言います。私たちはやはり、仏さんだと思っているから安心して見ていられると思うし、十一面観音みたいな人が世の中に現れたら、やっぱり怖いと思いますよね。

頼近　「目は何を見ているのですか、何を考えているのですか」という質問もありますが。

籔内　そのご質問の直接の答えになるかどうかわからないのですが、時代によって、仏様の視線というのは変わってくるのですね。古い時代に遡ると、遠い目をしているのです。時代がこちらへ近づいてくると、だんだん下のほうを見るようになり、江戸時代になると、もう完全に見下したような目になる。江戸時代の仏さんの目は、私はあんまり好きではないですね。

原島　怒っている顔では、仁王がありますが、仏像も怒っている顔がありますよね。では、大笑いしている仏像というのはあるのか。ないとすればなぜでしょうか。

籔内　大笑いする顔の仏像というのはあることはあります。十一面観音の真後ろに付いている顔は、暴力の暴に、悪いと書いて暴悪大笑面（ぼうあくだいしょうめん）といいます。これは、笑うということは、諸悪を吹き飛ばす力を持っていると考え、人間のいちばん弱い後ろ側に据えられているのです。人間、後ろから殴られたらおしまいですから、後ろを向いて大笑いをしている顔というのは、厄除けのような意味で使われているのだと思います。

しかし、大笑いをしている顔というのは、日本人のメンタリティの中ではあまり上品な姿ではないと思うのですね。ですから、大笑いしている仏像というのは、ほとんどないと思います。ただ、中国の道教などの絵には、大笑いをしている顔はありますね。寒山拾得（かんざんじっとく）なんていうのは、大笑いをしています。ですから、笑いというものに対する日本人と、中国人や他の国との見方の違いというのが関係しているということでしょう。ギリシャのバッカスは、豪快に大笑いしている。で

も、日本人には大笑いしている姿というのは、上品に映らない。それが笑っている仏像が少ない原因ではないでしょうか。

原島　三林さんにお聞きしたいのですが、演技の中でいちばん難しいのは、笑いの演技だと聞いたことがあるのですが、どうですか?

三林　たしかに、いちばん難しいと言われていますね。笑わせるより、お客様を泣かせるほうが楽だとも、昔から言われていて、それは事実ですね。落語の場合でも、師匠の米朝が話すと、お客さんがドバッと笑うのに、同じ話を私がしてもハハハぐらいですから、なんでこう違うのかしら、とそれは実感しています。

原島　人類学的に言うと、笑いが最後にできる表情なのです。動物は怒る、相手を威嚇するということはしますけれど。

三林　あ、たしかに動物は笑いませんよね。

原島　笑わないのですよ。馬が笑うという言葉がありますが、あれはそう感じているだけで、本当に馬が笑うことではないのです。笑うほど顔が柔らかくないですからね、馬は。笑うのは、チンパンジーの赤ちゃん。でも、子どもは笑うけど、大人になるとあまり笑わなくなるので、いちばん高級な表情とされているのですよ。

その中でも特に高級なのがsmile。Laughよりもsmile。両方とも笑いなのですが、スマイルは社会的な表情だとされています。ですからその表情を道具として使うというのですね。相手を騙すためにも、自分を隠すためにも、これを使う。必ずしも相手に好意を示す表情ではなくて、相手をバカにするときにも使う。そうすると、受け取るほうは、相手がどういう気持ちでその笑いをしているのかを、いろいろと考えなければならないということですよね。

三林　日本人はよく笑ってごまかすと言いますよね。

原島　ええ、ごまかすために笑っている、ほとんどの人は。そういう笑いは感情移入がされていない、形だけですよね。ただ、さっきの大笑いしている仏像があるかどうかの話で気がついたのですが、仏像というのはある意味で、能面と同じように、中間表情、無表情のほうがいいのかなあ、と思ったのですね。それは、こちらの気持ちを映すという意味で、向こうがはっきりした表情、たとえば大笑いしていたとしたら、こちらの気持ちを受け容れてくれないのではないか、中間的な表情をしているから、こちらの気持ちをそこに映すことができるのかな、という気がしたのですね。

藪内　泣くということでお話させていただきますと、お釈迦様がお亡くなりになったときを描いた涅槃図というのがありますが、そこで涅槃に入ったお釈迦様の周りに八部衆というお弟子さんのほか、虫やら何やらみんないるのですね。その中で大声をあげて泣いている人ほど、お

釈迦様の教えを理解していない。お釈迦様の教えを理解した人ほど、静かな姿をとっているのですね。だから、仏教では中道をよしとしますから、あまり感情を表に出さないほうがよいと、考えられていたのかもしれませんね。

三林　たとえば、文楽の人形の首(かしら)や、歌舞伎の隈取(くまどり)にも、大笑いしているというのはありませんね。

頼近　感情移入するということについて、田沼先生にもご質問が来ております。「あの悲しい状況のお子さんをお撮りになるときのお気持ちというのは?」という質問です。

田沼　写真家といえども感情の動物ですから、撮影中悲しいときもあります。しかし、悲しいときも写真を撮らなければいけない。それが写真家としての使命です。そこで一緒に泣いて写真を撮らなければ、プロ写真家ではなくなってしまいます。自分ではわかりませんが、悲しい場面を撮っているときは、その子どもの気持ちになっていたと、後になって思うことがあります。ですから、楽しいときは楽しい気持ちになり、悲しいときは悲しい気持ち、撮影している時は冷静に。それが写真家ではないかと思います。

頼近　ありがとうございます。三林先生、役者をしていらして、人の心をごまかす表情というのはあるのでしょうか。

三林　その表情というよりも、仕草、体全体で、そういうものを表すということはありますね。

原島　もし、詐欺師の役をやってくださいと言ったら、どう演技します?

三林　もういかにもそれらしくやります。騙そうとしている女優の役なら、いかにも女優らしく、それが学校の先生なら必要以上に学校の先生らしくということを意識しますね。じゃないと、詐欺師にならないわけでしょ。実際は、学校の先生らしくない先生もいらっしゃいますが、だけどここでは学校の先生ということをことさらに意識します。

原島　確かにそうかもしれません。「いかにも」というのが、いちばん意表をつくのかもしれません。

三林　メイクでも印象がかなり違ってきます。いちばん表情を変えやすいのは、みなさんどこだと思いますか?眉毛です。眉毛。娘役のときは紅を入れますが、女房になってお歯黒をつけたときは、青い青黛(せいたい)で描いて剃った眉に見せます。

原島　眉には眉山があって、それをどこに置くかで印象が決まるのですよね。今三林さん、少し遠目に置いている。普通は、黒目があって、黒目の外側のところを上に上げたところに置くのが標準的な眉山の置き方なのです。それよりも外側に置くと、突っ張っている印象がある。逆

にそれより内側に置いて、丸くすると優しい印象になる。やっぱり、その時代時代において、眉山の位置というのも動くのですね。

三林　江戸時代の浮世絵では、ヒューンって柳眉というのですか、優しい眉ですけど、今はみんな角つけていますよね。

頼近　顔の中の表情ということで、いちばんどこが表情豊かに出せるところなのですか。

原島　口の周りは比較的自分でコントロールできる。ところが、ごまかしにくいのが、眼球運動。それから眉毛が、何か自分の意識とは無関係にピクッと動くときがあるのですよ。やっぱり口で笑って、目は笑っていないとよく言われるでしょう。そういう意味では、目と眉の表情は難しいですよね。ごまかせない。それができるのが詐欺師です。

三林　目は口ほどにものを言い、とも言いますよね。

原島　その眉から感情を読み取るということを、われわれはやっているのですが、相手が眉を完全に剃ってしまうと、表情が読めないのですね。

頼近　三林先生、先ほどの挨拶のお話ですが、具体的に挨拶のどんなところが難しいのでしょうか。

三林　まず正座ができないということなのです。着物を着て正座をするときは、左足を引いて腰をおろしてから、着物の褄（つま）をきれいに入れて、スッと座るのですが、それができない。立つときも、両足いっぺんにピュンと立つのではなく、やっぱり片足立ててスッと立つのです。なんでもないことなのです。

頼近　女優さんというのは、それをやりながら台詞を言わなくてはなりませんよね。とても複雑な作業だと思うのですが。

三林　ふだんからお茶を入れないでペットボトルで飲んでいては、お茶を入れながら台詞を言うことはできませんよね。すべては日常からできていなければ駄目だということです。

原島　そういうのは、幼稚園や小学校から教育をしなければいけないと思いますよね。広い意味で小学校からの演劇教育は大切だとおもいます。先ほどの僕が女装をした話も、その格好をしなければ相手の気持ちがわからないということです。よく、車イスに乗ってみると、街がいかに不便かがわかるといいますね。小学校から、そういう自分中心ではない、自分と違う人の役をやるというのが大切なのではないでしょうか。

籔内　それは、社会性ということではないでしょうか。それぞれの社会のその場で、それなりの役目をするということを、小さい時から教育の中にも取り入れていくべきと思いますね。

田沼　要するに遊ばないからいけないのですね。人間と遊ばないで、機械と遊んでいるのです。身体を使って、友達とぶつかり合いをして自然の中で遊んでいれば、いろいろな社会の仕組みを覚えるのです。そういう経験がないから、社会性のない大人ができあがるのです。

三林　チャンバラごっこなんてしませんものね、今。

田沼　昔は子ども組というのがあって、行事や祭りを子どもたちが全部取り仕切っていたのです。それが戦後、子ども会になった。今度は支度から片付けまで、全部親がやってしまう。だから、子どもの独立心がひとつも生まれないのです。子どもが木に登ろうとすると危ないからやめさせる。だから子どもは落ちる経験ができないんです。そういう社会をつくってしまったんですね。

頼近　田沼先生のお顔を見ていたら、さきほどの明王のことを思い出しました。明王というのは、いったい何に対して怒っていたのでしょう。

籔内　私の恩師である西村公朝先生などは、明王の姿は、火事のときに火の中から自分の子どもを救おうとする母親の姿だというのです。だから、もう髪の毛を振り乱して、必死の形相をしている。決して怒っているのではないのですね。必死になって救おうとしている、言い換えれば、叱るということは、そういうことなのかと思います。

頼近　お話は変わりますが、三林さん、生徒さんの顔を見て、主役になれるなれないというのは、わかるものなのでしょうか。

三林　はい。でも、それは、美形であるとかではなく、顔から出てくるエネルギーだと思います。中身、あくまで、中身だと思いますね。だから、だれが美人ですかというのと、だれが主役ですかというのでは、答えが違ってくると思います。

原島　それは一種の顔のオーラみたいなものだと思います。オーラのある顔ない顔というのがあるような気がしますが、田沼先生はどう思われますか？

田沼　写真の場合は、撮る人と撮られる人の相性もありますし、一概には言えませんが、魅力を感じる人というのは、やっぱりそれなりのものを持っているのですね。しかし、人間と人間の関係は、心と心のつながりですからね。これはいけるなという人とそうでない人、その両方があるんです。撮らせて頂くのだから贅沢は言えませんがね。

原島　確かに、この人と一緒にやると絶対いいことがあると感じさせる人と、どう考えてもこの人には貧乏神がついているよねという人がいる。

頼近　今のお話ですと、撮られる側にしてみても、このカメラマンの

方好きだわ、何かお話したいわと思ったほうが、いい写真を撮ってもらえるということなのですか。

田沼　それは2通りあるのです。相手が写真を撮られるのを諦めるまで執拗に撮る方法と、その反対に、相手がこれから撮られるのだろうと思ったときには、もう撮り終わっている方法。

三林　こっちが思うようなときに撮ってくれる人というのは、そこそこの写真はできますけれど、オッという表情には撮れていないですよね。その反対に、え? なんで? こんなところ撮られたくないのに、というところでシャッター押すカメラマンのほうが、思わぬ良い結果が出たりしますね。

原島　撮り方もあるけれど撮られ方も重要ですよね。やはり相手がカメラを向けたときに、どういう気持ちでいるとか、どういうふうにしていると一番よく撮られるというのはありますか? せっかく撮られるならいい顔に撮ってもらいたい。

田沼　よそゆきの顔をされたときは、ダメなのです。

三林　おっしゃるとおりで、たとえばモニターをぼけーっと見ているとしますね。何も考えずに見ているその顔がいいのに、それがテレビに映った瞬間に、アッと意識した顔になってしまう。だから、やっぱり変な意識をしないゼロの顔というのが大切だと思うのです。

頼近　いや、ゼロでいる顔を見る機会というのは、ふつうはないですよね。自分の顔みるときは、鏡の前で必死につくっていますよ。

三林　いちばんいい顔して鏡見ますから。

原島　僕はときどきこう考えるのです。ここに400人いるとしたら、399人の顔は見えるのです。でも1人だけどうしても見えない顔がある。自分の顔ですよね。その見えないというのが、助かっている。見えないから自由に想像する。そのときに、自分はいい顔をしていると想像していると、それがまたいい方向へのフィードバックになり、本当にいい顔になっていくのではないかと思うのです。

三林　なるほどね。それは舞台でも同じことが言えると思います。私はいい女の衣装を着てかつらを被ったら、もう鏡を見ないのです。現実に引き戻されてしまいますから。女優さんの中には、何度も手鏡をのぞいて「こんなきれいな顔はない」と言って、舞台に出て行く方もおられますが、この違いですよね。ああ、負けているな、と思いましたけれど、私はいまだに自分を見て、「きれい」と思って出られませんから、もう鏡は見ないようにしているのです。

原島　それから、僕は目の前の相手がいい顔に見えてきたときは、たぶん自分もいい顔をしているのだろうと考えているのです。ある意味、僕の特技なのですが、目の前の女性をみんな美人にしてしまいます。

三林　（笑）そうやって口説いているわけですか。

原島　そう。それで相手が美人に見えたときは、自分も美男子になっていて、相手もそう見ているだろうと。

田沼　私の師匠の木村伊兵衛先生は、女を撮らせたら日本一と言われましたけれど、劇作家の戸板康二さんと対談しているときに、どうやったら木村先生みたいに美人に撮れるのか、という質問があったのです。そのとき「相手に惚れなきゃだめだね。写真を写す相手に惚れなかったらいい写真は撮れない」という言い方をしていましたね。

原島　顔を研究していると、インタビューに来られる方がみんな緊張して、「インタビューしながら顔の分析しているのですか」と尋ねられるのです。でも、実はできないのですね。あれ、おもしろいことに、相手が目の前にいてコミュニケーションしていると、顔の分析ってできない。逆に、どういうときが分析しやすいかというと、電車で前に座っている人の顔とか、テレビの音声を消して、顔だけ見ているときなのですね。つまりコミュニケーションしているときは、相手を人として見ている、でも分析するということはモノとして見ているということだと思います。

頼近　会場からの質問票の中に「質問ではないのですが、昔NHKのアナウンサーの方がいつもは仏頂面なのですが、とちったときに限って、ほんの一瞬ニッと笑うそのお顔がすごくいい表情でした」というご意見を書いてくださった方がいらっしゃったのですが、印象に残る表情を撮るには、やはり「一瞬」という要素が大きいのですか。

田沼　これは土門拳先生の話ですが、ハプニングがあったときが、いちばんいい写真が撮れる。自分が頭の中に描いていたように撮るのではダメだというのですね。それを「鬼が手を貸してくれた」写真という言い方をしていました。

三林　ふだんに見えるのは本音ではないのでしょうね。だからチラッと本音が見えたというようなおもしろさが、そういう写真にはあるのだと思います。

原島　それに、この人すごいなあという人が、ちょっとボロを出してくれたらうれしいよね。

三林　安心しますよね。

藪内　小学校のときに歯の矯正をしていた女の子がいまして、何十年たってその子に会ったときに、その矯正していた顔しか思い出さなかった。その印象は一生消えないですね。

原島　その逆もあるでしょう。ある一瞬素晴らしいなあと思うと、ずっとそれが消えないということも。

三林　でも、どちらかというと、人間変なことのほうが覚えていませ

んか？その変なことが、本音っぽいところなのではないでしょうか。だから、本音をいかによく保つかというのが、やはり勝負なのではないですか。

頼近　お話は尽きませんが、お時間がやってまいりました。原島先生、最後に今日のシンポジウムのまとめとして、一言いただけますか。

原島　今日は第2回目のシンポジウムですが、おもしろくなったところで終るなというのが、正直な印象です。ですから、何らかの形で、この話を続けられるといいなあと思うし、ここにいらっしゃる方々には、ぜひこの話を広めていただきたい。飲み屋で結構です。あそこでこういう話があったと。それがむしろおもしろいのかな、という気がするのです。聴く側ではなくて、皆さんもこれからはこういう話題を話す側になっていただきたい。今日の話題は、みんな自分の問題でもあるのですから。今日は結論がつくよりも、それぞれがこの問題をもうちょっと考えてみようかなというきっかけになればいいと思いました。

この機会に少し日本顔学会の宣伝をさせていただきます。日本で唯一の芸術・科学がいっしょになった「花王芸術・科学財団」と「日本顔学会」が、このシンポジウムを主催しておりまして、来年もう一回開催される予定です。

顔学会というと、それを研究している人しか入れないとお思いになるかもしれませんが、年間5000円の会費を払うことによって、どなたでも入れます。が、顔学会に入ったからといって、何かが安くなるとか、どういうサービスが得られるかという発想の人は入れません。しかし、みんなでいろいろおもしろいことができるという特典がある。会員には70歳代のおばあちゃんもいらっしゃいます。顔の実験をするときに70代のおばあちゃんが必要なときもあるでしょうから、そういうときには是非声をかけてください。実験台になりますと宣言してくださっています。5000円を払って自ら何かを一緒にやりたい。そういう方でしたら顔学会メンバーの資格は十分にあります。ぜひ一度、顔学会のURLを覗いたり、紹介パンフレットをご覧になってください。

頼近　本日は長い時間、本当に大勢の皆様方、ありがとうございました。パネリストの皆様方もありがとうございました。

公開シンポジウム「顔と文化」シリーズ（第2回）
【表現される顔】

発　行　財団法人 花王芸術・科学財団
〒103-8210 東京都中央区日本橋茅場町1-14-10（花王ビル内）
TEL（03）3660-7055・7056 FAX（03）3660-7994
編　集　財団法人 花王芸術・科学財団 事務局
印　刷　株式会社 サン制作
発行日　2008年1月1日

財団法人 花王芸術・科学財団
The Kao Foundation for Arts and Sciences
http://www.kao-foundation.or.jp/

日本顔学会
http://www.jface.jp/